修学旅行とナショナリズム

戦後の奈良・京都への旅行の再開・拡大過程を事例に

慶應義塾大学 SFC 研究所　菅沼明正

報告要旨

戦間期から戦時期に「皇国の聖地」として観光客や修学旅行生を集めた奈良･京都は、どのように「日本文化の中心地」となったのか。本報告は、教員と文部省を中心とする「教育界」と国鉄と旅行業者を中心とする「交通・旅行業界」に焦点をあて、敗戦後の修学旅行の再開と拡大過程を検証し、教員と他のアクターの相互作用で奈良･京都が「日本文化の中心地」として旅行され、国鉄などによってその旅行が広汎となったことを提示する。ナショナリズム研究における、国家によってつくられた「伝統」の「稼働」と「再稼働」の事例研究であり、また観光振興という経済的利益から実施された修学旅行の再開・拡大によるナショナリズム形成を論じていることから、「経済過程」によるナショナリズム形成の事例研究でもある（「修学旅行とナショナリズム　-戦後の奈良・京都への旅行の再開・拡大過程-」『KEIO SFC JOURNAL』Vo.17 No.1 掲載）。

結果

検証の結果、次のことが明らかとなった。

① 戦後に再開した修学旅行は、国家の教育政策ではなく、旅行業者と他のアクターとの関わり合いで、国民的な通過儀礼へと拡大したこと。

② 教員と旅行業者との相互作用で、戦前型の「伊勢・奈良・京都」でなく、「京都・奈良」が旅行先に選ばれたこと。

③ 一部の教員による旅行目的の模索・変更により「日本文化の中心地」として旅行されるようになったこと。

④ そして、この旅行は国鉄などによる「修学旅行専用列車」の整備により拡大･定着したこと、である。

教員が「変化」の担い手となることで、旅行先が「伊勢・奈良・京都」から「京都・奈良」へ転換し、さらに旅行目的の変更により「皇国の聖地」でなく「日本文化の中心地」として旅行され、また戦前と同様に、「旅行拡張」の役割を担う国鉄が関わることで、こうした旅行が拡大・定着したのである。

植民地支配された過去を持つ新興国や政治体制の転換のあった国では、前体制の「伝統」が異なる意味を付与され利用されることは珍しいことではなく、本報告はこうした「伝統」の稼働／再稼働（機能／再機能）の事例研究の一つと言える。だが新しく提示できる点もあり、それは、制度が一度用意されると国家権力による政治的利用がない場合でも、スイッチが入ることにある。明治政府によって用意された「伝統」は、戦前では地方当局や民間企業、政府が協力してスイッチを押すことで「皇国の聖地」として広汎に稼働した。実際に稼働したのは明治創建の橿原神宮が中心で、一部を除き国宝宝物や建造物はほぼ等閑視されたが、「聖地」の一部分を構成したのは間違いない。そして敗戦後、「教育界」と「交通・旅行業界」の相互作用によって「日本文化の中心地」として修学旅行で再び稼働したのである。こうした事実は、「国家による上からの動員」の視点からのナショナリズム研究で見落とされてきた点である。